

# 高大接続の視点で見通す 2025年度大学入試

大学入試において、入学志願者の準備に大きな影響を及ぼす変更等がある場合、大学はその内容を、2年程度前を目途に、可能な限り早期に公表に努めることが求められます。新学習指導要領に対応した最初の入試となる、現高校1年生が受験する2025年度大学入試は、まさにそれに該当し、2年程度前にあたる今年度が公表のタイミングです。しかし、公表済みの大学は22年9月15日時点で、国立27大学、公立16大学、私立11大学と、全体的に公表のペースは鈍く、一方で、高校では、日々の授業は進み、学校によっては高1生の文理選択の時期が迫ってきています。そうした先行きが不透明な状況の中、25年度入試に向けて、どのような方向性の下、どういった準備や対応をすればよいのか——多くの先生方がお持ちであろうその疑問や迷いが少しでも解消されるよう、今号では、25年度入試の基本情報を整理した上で、個別大学の25年度入試の方針を踏まえた、今後高校が取り組むべき課題を提示いたしました。その課題に先進的に取り組む高校の事例も含め、今号の特集が、25年度入試への道しるべの1つになりましたら幸いです。なお、11月11日（金）に実施するVIEW next 編集部主催のオンラインセミナーでは、25年度入試の最新情報をお届けする予定です。ぜひ、お申し込みください（同セミナーの詳しいご案内は、今号P.26をご覧ください）。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

## P.4 2025年度大学入試の動向 2025年度大学入試に関する情報を整理

日本の学校教育の変化／近年の大学入試の傾向／2025年度大学入試情報

### P.8 大学インタビュー1 青山学院大学 理念に掲げた人材像の育成に向けて、一般選抜で記述・論述式問題を拡大

### P.10 大学インタビュー2 大阪大学 研究に取り組む上で必要な資質・能力を明らかにし、社会課題に挑む人材の育成を目指す

### P.12 大学インタビュー3 九州工業大学 数理・データサイエンス・AIを、専門分野に応用・活用できる技術者の育成を目指す

### P.14 大学インタビュー4 佐賀大学 入学後の学生の活躍ぶりを踏まえて、高校での自主的な活動を重視した入学者選抜を実施

## P.16 高校が取り組むべき課題と事例 2025年度大学入試に向けた高校の検討課題

観点① 教育課程や教育活動の見直し／観点② 探究学習と総合型・学校推薦型選抜

### P.18 高校実践事例1 京都府・京都市立堀川高校

生徒主体で学び方を学ぶ、週1コマの「学びのアセスメント」で、生徒の自己調整力を高める

### P.21 高校実践事例2 山形県立山形北高校

探究の重要な要素を「探究の思考」に整理。希望進路の実現につながる力を育む

## P.24 本特集テーマのnext 大学入試におけるCBTが秘める可能性と今後の課題

名古屋工業大学大学院 工学研究科教授、アドミッションオフィス長

大学入試センター 大学入学共通テスト企画委員会CBT活用検討部会委員 林 篤裕

あつひろ

# 2025年度大学入試に関する情報を整理

本特集ではまず、高大接続改革が進められる背景にある社会の変化や、近年の大学入試の傾向を押さえるとともに、2022年9月27日時点で各大学が公表した25年度大学入試に関する情報の中で、高校が目すべきポイントを整理。さらに、個別大学の動向として、多面的・総合的評価を推進する4大学に、25年度入試に関する方針や、その背景にある大学が求める人材像、大学の学びを通じて育成する資質・能力などについて、話を聞いた。

## 日本の学校教育の変化

### 「探究」「文理横断」「AI人材」を切り口に、大学・高校教育が変わる

教育・人材に関する政策の方向性をまとめた「Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」(\*1)では、デジタル化が進み、新たな価値創造とイノベーションが求められる社会においては、文理を問わず、データサイエンスの知識・技能と、様々な視点を備えた人材が必要であることが示された。そうした人材の育成に向けては、文理横断的に学ぶことが大切であると指摘している。

また、経済産業省「未来人材会

議」では、2050年に必要の高い能力として、「問題発見力」「的確な予測」「革新性」などを上位に挙げた。そして、それらの能力の育成に向けては、知識の習得と探究力の鍛錬との間をらせん状に循環しながら能力を高めていく教育の重要性が示唆された。

大学教育は、そうした社会の要請に対応して既に変化している。その1つが、「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度」だ。同制度は、デジタル人材の不足に対応するため、数理系の基

図1 高大接続改革を取り巻く環境変化の全体像



※編集部で作成。

\*1 内閣府に設置された、重要政策に関する会議の1つである「総合科学技術・イノベーション会議」の教育・人材育成ワーキンググループがまとめた。

基礎的リテラシーの裾野を広げることで、トップクラスの人材を育成する施策である。数理・データサイエンス教育に関する正規課程教育のうち、一定の要件を満たした優れた教育プログラムを文部科学省が認定・支援する。21年度から認定が始まり、基礎的な能力を育成する「リテラシーレベル」には、国公私立合わせて162大学が認定された。同プログラムは、多くの大学が、文理を問わず全学共通科目として実施する予定だ。そのため、高校においても、文理を問わず数学や情報をしっかり履修しておかなければ、大学入学後に厳しい状況に置かれることが予想される。

以上のような情報から、①探究、②文理横断・STEAM教育・総合知、③AI人材が、今後の日本の教育におけるキーワードであり、社会↓大学教育↓大学入試↓高校教育と、連動していることが分かる(図1)。高校教育では、探究学習や数理系の学び、文理分断からの脱却が、今後一層推進されていき、大学入試への対応もそうした視点が鍵となっていくだろう。

### 近年の大学入試の傾向

## 総合型・学校推薦型選抜の拡大が継続。様々な方法で「探究型の入試」を実施

大学教育の変化に応じて、大学入試での評価の重点が転換しており、総合型選抜と学校推薦型選抜による入学者数は着実に増加している(図2)。国立大学協会が目標に掲げる、両選抜方式の入学者が入学定員の30%(\*2)には到達していないが、国立大学では、22年度の入学定員の19%が両選抜方式の入学者だ(\*3)。

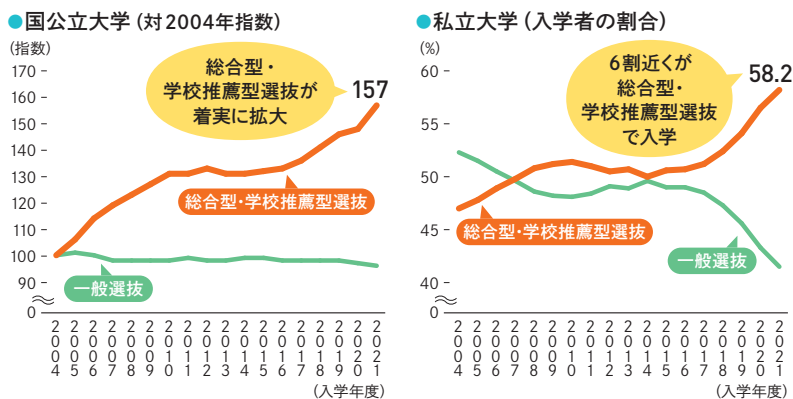
総合型選抜では、探究の観点で受験生を評価し、スムーズな高大接続を図ろうとする大学が増えている。大学はまさに探究をする機会であり、高校時代の探究が大学での研究につながると思われるから。各大学は選抜方法を様々な工夫しており(図3)、いわゆる「探究型の入試」の拡大傾向は、今後も続くと思える。

大学での生徒の活躍を考えると、「探究型の入試」で評価される

ような生徒を育むことは、大学進学者を送り出す高校側の役割とも言える。学習指導要領の解説によ

ると、「総合的な探究の時間」では、探究テーマと自己のキャリア形成の方向性を関連づけることが大切であると、繰り返し述べられている。自分が高い関心を持ち、生涯を通じて追究していきたいことと、大学で研究を深めたいことが一致した生徒は、「探究型の入試」にスムーズに対応できるだろう。

図2 総合型・学校推薦型選抜、一般選抜による入学者数の推移



\* 文部科学省公表資料を基に編集部で作成。

図3 「探究型の入試」の種類と、実施大学

実績・プロセス評価型	探究活動の成果やプロセスから得たものを評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>大分大学経済学部/総合型選抜(課題探究)</li> <li>桜美林大学/探究入試 Spiral</li> <li>工学院大学/探究成果活用型選抜</li> </ul>
高大接続型	大学と連携した探究活動の成果を評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>金沢大学/KUGS 特別入試</li> <li>崇城大学/探究活動プログレス選抜</li> </ul>
資質・能力評価型	探究型の資質・能力を評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>お茶の水女子大学/新フンボルト入試</li> <li>奈良女子大学/探究力入試「Q」</li> <li>島根大学/へるん入試</li> <li>立命館アジア太平洋大学/世界を変えたい人材育成入試~ロジカル・フラワー・チャート入試~</li> </ul>

※編集部で作成。

\* 2 「2020年度以降の国立大学の入学者選抜制度—国立大学協会の基本方針—(令和3年9月17日改訂)」による。  
 \* 3 文部科学省「令和4年度国立大学入学者選抜の概要」による。

## 基本的に現行課程を引き継いだ科目設定。 地理歴史・公民の科目選択に要注意

25年度入試の出題教科・科目は、各大学が22年度中に予告・公表することになっている。文部科学省から、可能な限り早期に検討し、予告・公表するよう通知があったが、22年9月時点で予告・公表した大学は決して多くない。例えば、「情報Ⅰ」の扱いや大学入学共通テストで課す科目のみを公表するなど、段階的に公表する大学も少なくない。

ここでは、各大学が公表した22年9月時点の情報から分かることを整理した。VIEWnext編集部が11月11日に開催するオンラインセミナーでは、最新の公表情報を整理して伝える予定だ（P.26参照）。

高校の学習指導要領が改訂されても、大学のアドミッション・ポリシーが大きく変化することは基本的にはない。大学入学共通テ

ストにおける「情報Ⅰ」の新設は非常に大きな変化だが、それ以外は、基本的に、現行課程の教科・科目を引き継いだ入試科目が設定されている。ただ一部には、25年度入試を機に、入試のあり方を見直す大学・学部もある。自校の生徒に進学希望者が多い大学の入試科目の予告・公表には注目してもらいたい。

### 国語

#### ◎大学入学共通テスト

試験時間が現行の80分から90分となる。大問の構成については未定。

#### ◎個別学力検査

現行入試で「国語総合」を課している大学・学部は、おおむね「現代の国語」「言語文化」に、「現代文B」「古典B」を課している大学・学部は、おおむね「論理国語」「文学国語」「古典探究」に読み替える形で指定しており、入試科目の実態としては大きな変化はないと言える。

### 地理歴史・公民

#### ◎大学入学共通テスト

①『地理総合、地理探究』、②『歴史総合、日本史探究』、③『歴史総合、世界史探究』、④『地理総合、歴史総合、公共（から2科目）』、⑤『公共、倫理』、⑥『公共、政治・経済』の6科目から最大2科目の選択となる。同じ科目がある組み合わせは、②と③の組み合わせを除いて受験できないので、要注意だ。

6科目のうち、④を除く5つの出題科目は、ほぼすべての大学で利用される。④は、現行入試で「地理A」「日本史A」「世界史A」を利用しない大学・学部において利用されないことが多い傾向にある。つまり、難関大学や文系学部、医学部において利用されない傾向にある。

また、長崎大学（教育学部学校教育教員養成課程中学校教育コース文系前期）のように、現行入試で「地理A」「日本史A」「世界史A」での受験が可能でも、25年度入試では、④で受験ができない場合があるので、注意したい（図4）。

#### ◎個別学力検査

歴史については、東京大学（文科一～三類）のように、「日本史探究」「世界史探究」を出題科目とした大学と、早稲田大学（人間科学部）のように、「歴史総合、日本史探究」「歴史総合、世界史探究」とした大学に分かれる。後者の場合、学習院大学が公表した資料には、「歴史総合」を履修していない「旧教育課程履修者に不利とならないよう配慮して出題」と明記されていた。明記していない大学も、出題上で配慮するものと予想される。

図4 大学入学共通テストにて地理歴史・公民を課す際の『地理総合、歴史総合、公共』の選択

<p>地理歴史・公民を課す際に『地理総合、歴史総合、公共』の選択を可とする大学</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>旭川医科大学・医（看護）</li> <li>帯広畜産大学</li> <li>室蘭工業大学</li> <li>筑波技術大学</li> <li>筑波大学</li> <li>宇都宮大学</li> <li>東京学芸大学</li> <li>奈良女子大学・理、工（理2型）、生物環境【食物栄養以外】</li> <li>九州工業大学</li> <li>長崎大学【教育（中学文系）〈前〉、情報データ科学〈前後A〉以外】</li> <li>札幌医科大学</li> <li>会津大学</li> <li>群馬県立県民健康科学大学</li> <li>山梨県立大学</li> <li>三重県立看護大学</li> <li>京都市立芸術大学</li> <li>大阪公立大学【医（リハビリ）〈前〉以外】</li> <li>広島市立大学</li> <li>山口県立大学</li> <li>福岡県立大学</li> </ul>
<p>地理歴史・公民を課す際に『地理総合、歴史総合、公共』の選択を不可とする大学</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>旭川医科大学・医（医）</li> <li>電気通信大学</li> <li>東京大学</li> <li>東京外国語大学</li> <li>名古屋大学</li> <li>大阪大学</li> <li>神戸大学</li> <li>奈良女子大学・文、工（歴公2型）、生物環境（食物栄養）</li> <li>九州大学</li> <li>長崎大学・教育（中学文系）〈前〉、情報データ科学〈前後A〉</li> <li>大阪公立大学・医（リハビリ）〈前〉</li> </ul>

※編集部で作成。詳細は各大学の発表資料をご覧ください。

## 理科

大学入学共通テスト、個別学力検査ともに、特筆すべき大きな変化はない。一部、25年度入試を機に、出題科目を見直す大学・学部があるので、自校の生徒に進学希望者が多い大学・学部の情報は、確認しておきたい。

例えば、宇都宮大学（地域デザイン科学部建築都市デザイン学科）では、一般選抜前期・後期日程の大学入学共通テストにおいて、現行入試では、「物理」が必須で、「化学」「生物」「地学」から1科目を選択することになっているが、25年度入試では、「物理」「化学」「生物」「地学」から2科目の選択となる。また、三重大学（工学部建築学コース）では、一般選抜後期日程の大学入学共通テストにおいて、現行入試では、「物理」「化学」「生物」「地学」から2科目を選択するが、25年度入試では「物理」「化学」の指定となる。

## 数学

### ◎大学入学共通テスト

数学②における出題が『数学Ⅱ、数学B、数学C』のみとなり、「数学Ⅱ」単体での出題がなくなった。「数学B」の2項目（数列、統計的な推測）及び「数学C」の2項目（ベクトル、平面上の曲線と複素数平面）の計4項目から3項目を選択解答することとされ、試験時間は60分から70分に延びることになる。現行の大学入学共通テストでは、約5,000人もの受験生が「数学Ⅱ」を受験していたが、教育課程上「数学B」「数学C」を十分に学習できない生徒にとっては、志望校の選択肢が狭まることになる。

### ◎個別学力検査

国立大学、私立大学の理系学部では、「数学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・A・B・C」を出題科目とする大学・学部が多いが、基本的には現行入試と同じ重みだと考えてよい。ただし、現行入試において、「数学B」の3つの分野「確率分布と統計的な推測」「数列」「ベクトル」のうち、「数列」「ベクトル」を指定している大学の中で、25年度入試においては、「数学B」の「統計的な推測」を含むこととした大学もある。東京大学（理科一～三類）、東京学芸大学（A類・B類数学コース、E類情報教育コース）などが、それにあたる。

国立大学の文系学部で個別学力検査に数学を課し、範囲を明示している大学については、「数学C」の「平面上の曲線と複素数平面」は出題範囲としないとしている。今後、募集要項等で詳細の確認が必要ではあるが、基本的に、文系学部では「平面上の曲線と複素数平面」は出題されないと考えてよいだろう。

一方、範囲を明示していない大学も多数あり、「数学B」の「統計的な推測」が出題範囲に含まれるのか今後の発表が待たれる。ただ、大学進学後、多くの大学で、文理を問わず「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」を開講する動きが活発になっていることを考えると、「統計的な推測」は学習しておくべき分野と言える。

図5 大学入学共通テストにおける「情報Ⅰ」の配点

大学名	方式	大学入学共通テスト配点			個別学力検査配点	配点合計
		共計	情報Ⅰ	備考		
会津大学	A	100	100	1教科1科目（理科、情報から1教科高得点採用）	500	600
	B	1000	100	6教科8科目（「情報Ⅰ」は必須）	500	1500
群馬県立県民健康科学大学 診療放射線学部	一般	700	100	4 or 5教科6科目（外国語、数学①、数学②必須）（国語、物理、化学、生物、「情報Ⅰ」から高得点の3科目を採用）	未公表	未公表
三重県立看護大学	前	550	50	6教科6科目（「情報Ⅰ」は必須）	220	770
	後	750	50		段階評価	750
京都市立芸術大学 美術学部	一般	500	100	美術、工芸：4教科4科目（国語、地理歴史・公民、外国語必須）（数学①、理科、情報から1科目選択） * 600点を500点に換算	未公表	未公表
		700	100	デザイン：5教科5科目（国語、地理歴史・公民、理科、外国語必須）（数学①、情報から1科目選択）		
		600	100	総合芸術：4教科4科目（国語、外国語必須）（地理歴史・公民、理科から1科目選択）（数学①、情報から1科目選択）		
京都市立芸術大学音楽学部（作曲、指揮、音楽学）	一般	600	200	3教科3科目（国語、外国語必須）（地理歴史・公民、数学①、数学②、情報から1科目選択）		

※編集部で作成。詳細は各大学の発表資料をご覧ください。

## 情報

### ◎大学入学共通テスト

試験時間は60分。国立大学の一般選抜においては、「情報Ⅰ」を選択科目とする大学・学部も一部あるが、必須で課す大学・学部が大半である。総合型選抜と学校推薦型選抜においては、「情報Ⅰ」を必須とする大学・学部が多いが、判断はそれぞれ異なるので、個別に確認が必要だ。

公立大学は、「情報Ⅰ」を必須で課す大学・学部もあるが、国立大学に比べて、選択科目とするか、または課さない大学・学部が多い。

私立大学は、公表した大学はまだわずかだが、「情報Ⅰ」を必須とする大学・学部はなく、一部が選択科目として利用するとしている。

なお、「情報Ⅰ」の配点について公表した大学の一部を、図5にまとめた。他教科・科目と比べて極端に配点が小さいということはない。

### ◎個別学力検査

課す大学・学部は、まだ見られない。

# 大学 インタビュー 1

## 青山学院大学

### 理念に掲げた人材像の育成に向けて、 一般選抜で記述・論述式問題を拡大

2021年度、思考力・判断力・表現力を測る一般選抜へと入試改革を断行。入学から卒業まで一貫した教育姿勢で、理念に掲げた「地球規模の視野」と「自ら問題を発見し解決する知恵と力」の育成を図る。

#### 21年度、思考力・判断力・表現力を測る入試に一般選抜を改革

青山学院大学は、1996年、自学の理念を、「地球規模の視野にもとづく正しい認識をもって自ら問題を発見し解決する知恵と力を持つ人材を育成する」と明文化した。阪本浩学長は、「本学に入学してほしい学生についても、理念に掲げる育成を目指す人材像と一致している」と語る。

「高校生の皆さんには、高校時代から、人々の生活や社会について広く関心を持ち、自分が特に関心を持ったテーマを、主体的に突き詰めて学んでほしい」と思っています。さらに、学んだことをレポートやプレゼンテーションなどの形で

表現する活動にも、積極的に取り組むことを期待しています。物事を突き詰めたり、学んだことを表現したりする経験は、自分でテーマを設定して取り組む大学での研究において、必ず生きてきます」

同大学は21年度入試より、大学教育との接続を重視し、その適性を測るため、入試改革を行った。一般選抜（個別学部日程）で課す各科目において、受験者の思考力・判断力・表現力をより丁寧に測ろうと、記述・論述式問題を増やした。さらに、学部・学科によっては、多面的に思考力を測るために、教科横断型の総合問題を出題している。

「現在は、マークシート方式の一般選抜（全学部日程）も実施し

ています。この全学部日程と個別学部日程の関係については、今後さらに検討していきたいと考えています」

大学入学共通テストを利用する選抜方式では、23年度入試から、複数の学部・学科において、合否判定に利用できる科目数を、従来の3科目に加え、4〜6科目に増やした「新規科目型」を設ける。

「大学での学びを通じて、理念に掲げた『地球規模の視野』で物事を捉えられるようになるためには、高校時代に、基礎的な学力を文理の偏りなく身につける学習が大切だと考えます。そうした学習にしっかりと取り組んできた高校生を評価しようと、『新規科目型』を設定しました。合否判定に利

用できる科目数は、今後増やす方向で検討できればと考えています」

学校推薦型選抜や総合型選抜でも、受験者の思考力・判断力・表現力を評価することを重視している。「例えば面接で、海外留学先での学びを通じて広がった視野についてどうと話ししたり、小論文で、探究学習での経験を盛り込みながら論を展開したりするなど、自分なりの視点や問題意識を持っている高校生は、面接での発言や小論文の内容の質が高いです。華々しい成果のみを評価するのではなく、高校生がどんな活動をして、何を学んだのかをしっかりと見取った上で、合否を判断したいと考えています」

#### 2025年度入試情報（\*）

- 学校推薦型選抜や総合型選抜も含めて、基本的には現行の方針を継続。
- 大学入学共通テストを利用する方式や個別学力検査で、「情報Ⅰ」や「歴史総合」「地理総合」などを課すか検討中。2022年度内に公表予定。

\* 2022年9月8日現在。



学長  
阪本 浩  
さかもと・ひろし  
2019年12月から現職。

地理歴史科や情報科の科目を  
25年度入試でどう課すか検討中

同大学が21年度入試より行った入試改革の目的と、新学習指導要領で目指すことは合致している。すなわち、新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、その評価だ。25年度入試も、学校推薦型選抜や総合型選抜を含めて、基本的には現行の方針を継続する予定だ。

ただ、大学入学共通テストを利用する選抜方式や、大学入学共通テストと個別学力検査を併用する選抜方式では、学部・学科によっては、大学入学共通テストの「情報Ⅰ」を必須科目や選択科目として新たに課す可能性があるという。

また、「地理総合」「地理探究」「歴史総合」「日本史探究」「世界史探究」を、大学入学共通テストや個別学力検査でどのように課すかも、検討中だ。

「国立大学は、大学入学共通テストで『情報Ⅰ』を課すことを発表しましたが、高校現場では、情報科の指導ができる教師の確保に苦労しているという話を耳にします。他大学の動きとともに、高校現場の状況も考慮しながら、判断したいと考えています」

同大学では、遅くとも22年度中に、25年度入試の出題教科・科目を確定し、公表する予定だ。

リベラル・アーツ教育により、  
多角的な視点を養う

同大学の理念は、リベラル・アーツ教育に力を注いできたことにおいても体现されている。

「問題の発見・解決に向けては、多角的な視点から物事を考え、判断することが求められます。そうしたことができるようになるためには、専門領域を深めることに加えて、リベラル・アーツを身につけることが非常に重要だと考えています」

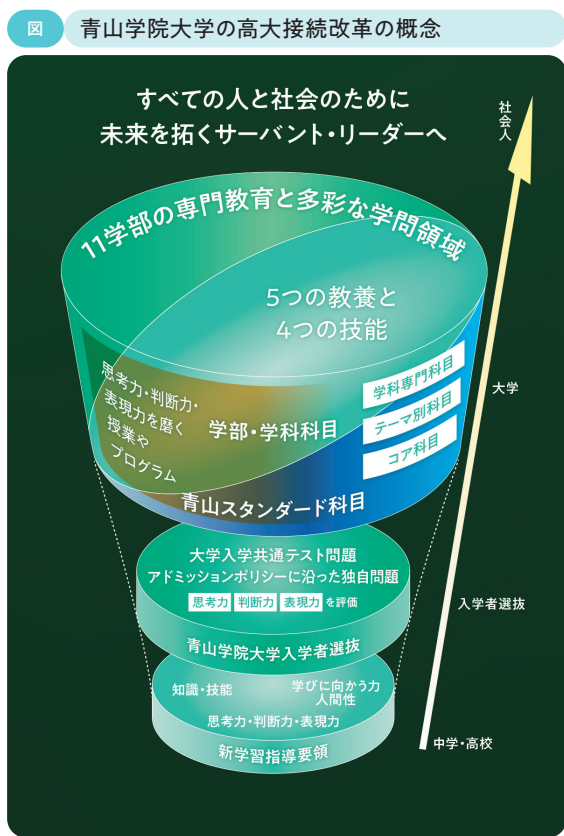
同大学のリベラル・アーツ教育の柱となるのが、全学共通教育シ

ステム「青山スタンダード」だ。学部・学科にかかわらず、一定範囲の知識・教養と、一定水準の技能・能力を備えることを目指す「青山スタンダード科目」を、全学年に設置。学生は専門科目と並行して、4年間を通して履修する。

「青山スタンダード」で重視しているのは、学生が自ら問いを立て、仲間との対話を通じて思考力・判断力・表現力を磨く活動を多く行うことだ。例えば、1年次の選択科目「フレッシュチャーズ・セミナー」は、異なる学部・学科の学

生約20人の少人数クラスで構成され、教員と学生、学生同士の対話を重視するゼミ形式で行われる。専門性が異なる学生が意見を出し合うことで、視点を増やし、異分野の他者に自分の意見を分かりやすく伝える表現力を磨く。

「広い視野や主体的に学ぶ力などは、本学が入学生に求めているものであり、本学でさらに磨くことを目指しています。入学から卒業まで、首尾一貫した教育姿勢によって、本学の理念を具現化しているのです(図)」



※大学資料をそのまま掲載。

## 大学 インタビュー 2

### 大阪大学

## 研究に取り組む上で必要な資質・能力を明らかにし、 社会課題に挑む人材の育成を目指す

社会課題に挑戦する人材の輩出を重点戦略に掲げる大阪大学は、多様な観点での入学者選抜を実施。入学後は学生の成長を可視化し、資質・能力を伸ばす体制を構築している。

### 教科学習では、 自ら答えを導き出す経験を

大阪大学は、2022年1月に、中長期的な経営ビジョンである「OU (Osaka University) マスタープラン2027」(図)を取りまとめた。そこでは、「未来の様々な社会課題に挑戦する力強い人材」の輩出を重点戦略に掲げている。豊田岐聡副学長は、「本学には、我々が持つ『知性』、『英知』を結集して社会との共創を活性化させ、社会を変革する力を生み出すことが期待されている。そのため、好奇心と試行錯誤する力を備えた学生を求めている」と語る。

課題を発見し、試行錯誤しながら答えを導き出す経験は、特別な

活動に参加しなくても、高校の教科学習や特別活動で積むことができると、豊田副学長は強調する。

「例えば、数学の問題の中には、解法が1つではなく、複数存在するものがあります。すべての解法を丸暗記して入試を乗り切る受験生も少なくないですが、それでは大学入学後、太刀打ちできない問いに幾つも出合うでしょう。途中でつまずいたら、別のアプローチに挑戦し、よりよい解法を見つける。高校生の皆さんには、そのように粘り強く試行錯誤する経験を、普段の教科学習の中で積んでほしいと思っています」

粘り強く取り組む原動力は「好奇心」だと、豊田副学長は述べる。「私が子どもの頃は、時計やテ

レビを分解するなど、不思議だなと思ったことは、何でも自分の手で調べてみるのがあたり前でした。今は、スマートフォンなどで調べれば、すぐに答えが見つかるため、自分で考え抜く力が不足し、研究を主体的に進められない学生が増えていると感じます。実験に何度も挑戦し、仮説通りの結果が出なくても、粘り強く取り組めるよう、普段の生活においても好奇心を大切にし、答えが1つではない問いに向き合う時間を大切にしたいと思っています」

同大学では、アドミッション・ポリシーとして、「確かな基礎学力及び主体的に学ぶ態度を有し、自ら課題を発見し探究しようとする意欲に溢れる人を受け入れる」

と掲げている。

そのような学生を、多様な観点で適正に選抜するため、17年度入試より、推薦入試(現学校推薦型選抜)とAO入試(現総合型選抜)を実施している。

また、17年度に推薦・AO入試で入学した学生が、4年間にわたってどのように成長したのかを、追跡調査した。その結果、推薦・AO入試で入学した学生は、一般入試(現一般選抜)で入学した学生と比べてGPA(※)が高く、4年次に行った指導教員による評価においても、「研究力」が高いことが明らかになった。

「指導教員には、『実験が仮説通りにいかなかったも、諦めずに取り組むことができる』『課題・テ

### 2025年度入試情報(※)

◎文理関係なく、大学入学共通テストを課す選抜においては、大学入学共通テストの「情報I」を課す。

\* 2022年9月15日現在。

※ Grade Point Average の略。履修科目の評点に単位数を加味して算出する成績評価値。個々の学生の到達水準を測る目安に用いることができる。





副学長  
豊田 岐聡  
とよだ たかのり  
2018年4月から現職。

マに関して、事例や経験などから、法則性を見いだしたり、仮説を形成したりすることが『できる』など、研究に対する主体性を評価してもらいました。その結果、すべての項目で、推薦・AO入試で入学した学生の評価が一般入試で入学した学生の評価を上回っていました。学校推薦型選抜や総合型選抜では、高校時代にどのような課題にどう取り組み、何ができたようになったのかを、自分の言葉で語れるのかどうかを見るための面接や口頭試問を、25年度入試以降も引き続き、実施したいと考えています」

25年度入試では、全学部で共通テストの「情報Ⅰ」を課す

同大学では、22年5月に、新学習指導要領に対応した25年度大学入学者選抜における出題教科・科

目等を発表した。入学希望者に求める資質・能力は、現行の入試から変更はないが、大学入学共通テストの「情報Ⅰ」を課すことにした。その理由を、豊田副学長は次のように述べる。

「今後は、文理関係なく、情報活用能力が必要になることは間違いありません。例えば、文系学部でも、膨大な資料から特定のキーワードを抽出する際は、データ分析のスキルが必要です。そのため、高校時代には、コンピューターの基礎やビッグデータを扱う素養を身につけておいてほしいと思っています」

コンピューターをツールとして活用する力を備えた高校生も多いが、「なぜ、コンピューターは動くのか?」「どのようにしてメモリに記憶しているのか?」などといったことにも興味を持ち、コンピューターの原理を学んでほしいと、豊田副学長は話す。

「情報の授業では、コンピューターの基本構成や動作の原理を理解してほしいと思います。そうした基礎知識を学び、仕組みを理解

することが、プログラミングやデータ分析を学ぶ土台となり、大学での研究に必要な高度な情報活用能力の修得につながります」

データを活用し、個別最適な学習を支援

「OUマスタープラン2027」では、単に「社会に貢献する」ということにとどまらず、一歩踏み込み、新たな「社会を創造していく大学」を目指し、各種教育環境の整備を進めている。

その1つが、22年4月に立ち上げられたStudent Life-Cycle Support System (SLiCS)だ。SLiCSは、データを基盤とした、個別最適学習・学生支援システムの構築を目的としている。

「本システムで

は、入学前から、卒業後の活躍までを見据えた学生のキャリアにかかわる情報やデータを蓄積、分析する予定です。その結果に基づいたフィードバックを、学生一人ひとりにすることで、個別最適な学習の支援を目指しています。そして、本学での教育成果を可視化することで、本学による社会への貢献を明らかにしていきたいと思っています」

図 OU マスタープラン2027の概要



※大学資料をそのまま掲載。

# 大学 インタビュー 3

## 九州工業大学

### 数理・データサイエンス・AIを、専門分野に 応用・活用できる技術者の育成を目指す

社会の問題解決に貢献し、新たな価値を生み出す技術者の育成を目指す九州工業大学。  
総合型選抜では、他者と協働する際に鍵となる「書く力」と「話す力」を重視している。

「プログラミング的思考」と  
「書く力」と「話す力」を重視

九州工業大学は、建学の理念として、「技術に堪能なる士君子」の養成を掲げ、技術に精通するとともに、道徳心も兼ね備えた技術者の育成を目指している。

2022年度からは、「MDAS Hプログラム」(図)の下、数理・データサイエンス・AIの教育を積極的に推進し、それらの知識・技能を様々な専門分野に生かせる技術者の育成を開始した。

同プログラムへの接続も踏まえ、「プログラミング的思考」を備えた学生に入学してほしいと、安永卓生副学長は語る。

「小・中学校で学んだ『プログ

ラミング的思考』をより抽象化するとともに、情報や情報技術を活用して身近な問題を発見し、その解決策を考えるとといった経験を、高校生の皆さんには積んでほしいと思っています」

そうした経験を積むためには、「情報」を単一の教科として学ぶだけでなく、様々な教科・科目の内容と関連づけながら学ぶことが重要だと、安永副学長は述べる。

「例えば、情報で学ぶデータ分析の手法は、数学や理科だけでなく、地理歴史・公民でも役立つ。コミュニケーションツールとして英語を様々な場面で活用するように、情報の授業で身につけた力も、他の教科・科目の学びで生かしてほしいと思っています。」

言うのも、大学での研究や企業での新規事業開発では、複数の学術分野を連携させながら問題解決に取り組む必要があるからです。高校時代には、他の教科・科目との連携が図りやすい情報や『総合的な探究の時間』での学習を通じて、問題解決に取り組む素地を養ってほしいと思っています」

また、同大学では近年、「未来思考キャンパス構想」を掲げ、キャンパスの中に、最先端のICTを駆使した施設の整備を進めている。その代表的な施設が、22年5月にオープンした、コワーキングスペース「GYMLABO」だ。学生が企業や他大学の人材と交流できる同施設を設置し、そこで他者と協働することで、よりよいア

イデアを創出できる学生を育成しようとしている。そのため、他者と協働する際に鍵となる「書く力」と「話す力」を、高校時代から鍛えてほしいと、安永副学長は語る。

「近年、大学のレポートなどで論理的な文章を書くことが苦手な学生が増えています。新学習指導要領で新たに設けられた『総合的な探究の時間』や『論理国語』などの科目を通じて、自分の考えを論理的かつ相手に的確に伝わる文章にまとめる経験を積み、『書く力』を鍛えた学生が入学してくれることを期待しています」

「話す力」は、協働的な学びを通じて磨いてほしいと語る。「社会では、専門性とともにコミュニケーション力が求められま

#### 2025年度入試情報(\*)

◎一般選抜と総合型選抜Ⅱ、学校推薦型選抜Ⅱ(工学部のみ)で、大学入学共通テストの「情報Ⅰ」を課す。2022年度内に配点を公表予定。

\* 2022年9月15日現在。



副学長  
安永卓生  
やすなが・たくお  
2022年4月から現職。

す。仲間との協働によって思考が深まり、よい取り組みができたと思える経験を多く積んでほしいと思っています」（安永副学長）

そうしたアウトプット力を向上させるためには、自身の学びを振り返る機会を充実させることが重要だと、安永副学長は説明する。

「高校生の皆さんには、授業や小テスト、単元ごとの振り返りを大切にしてほしいです。自分の学習をメタ認知する習慣をつけることで、自分の課題に気づき、それを次の学びへとつなげていくことができるからです」

総合型選抜Ⅰ・Ⅱでは、入学希望者の「書く力」と「話す力」を評価するため、レポートや問題解決型記述式問題を課しており、23年度入試でも継続する予定だ。問題解決型記述式問題は、小・中学校、高校で学ぶ理科や数学の内容をテーマにした、正解が1つとは

入試科目に設定することで、  
情報教育の活性化に期待

限らない問いについて、自分が考えた答えを論理的に記述する問題だ。加えて、グループディスカッションを行い、リーダーシップやフォロワーシップなどの役割を果たせるかを評価する。

21年度入試からは、特別選抜の募集定員を3割までに増やしており、アウトプット力に長けた学生を選抜し、大学の核となる人材として育成したいと考えている。

同大学では、新学習指導要領に対応した25年度入試でも、基礎学力に加えて、先に掲げた資質・能力を備えた学生を受け入れるため、同様の選抜を実施予定である。

また、25年度入試の一般選抜と総合型選抜Ⅱ、学校推薦型選抜Ⅱ（工学部のみ）で、大学入学共通テストの「情報Ⅰ」を課す予定だ。

「入試科目になることで、高校の情報教育が活性化することを期待しています。特に本学では、情報科の教員を養成しているため、

データサイエンスやAIを  
学び、研究へ応用する力を

力のある高校生が本学に入学し、将来的には、地域の学校で教員として活躍してほしいと思っています。配点については検討中ですが、22年度内には発表予定です」

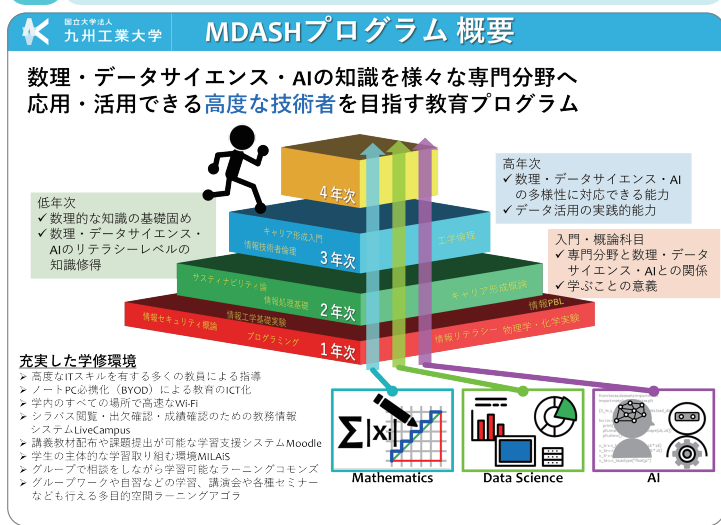
同大学は入学後も、「プログラミング的思考」や「書く力と話す力」を鍛える教育を行っている。その1つが、「MDASHプログラム」だ（図）。

数理的な基礎知識や数理・データサイエンス・AIのリテラシーレベルの知識を修得後、実践的な演習や実験科目の履修を通して、それらの知識・技能を様々な専門分野へ活用できる能力を育成することを

目指している。

「高年次になるに連れて、学生が主体となって、答えが1つではない課題に取り組めるプログラムにしています。同プログラムなどを通じて、社会の問題解決に貢献し、新たな価値を生み出すことができる技術者を育成していきたいと考えています」

図 MDASH プログラム 概要



※大学資料をそのまま掲載。

# 大学 インタビュー 4

## 佐賀大学

### 入学後の学生の活躍ぶりを踏まえて、高校での自主的な活動を重視した入学者選抜を実施

佐賀大学は、一般選抜で「特色加点制度」を設けるなど、高校での自主的な活動を重視した入試を行ってきた。そうした入試を経た学生は、大学でも大きく伸びているため、今後も現状の入試を維持する方針だ。

#### 高校時代の活動を評価する 特色加点制度を、一般選抜で導入

佐賀大学は、一般選抜で、高校時代の活動を評価する「特色加点制度」を導入している。活動の内容及び活動とアドミッション・ポリシーや大学入学後の学びとの関連を、それぞれ400字以内で記述した書類を提出すると、大学入学共通テストと個別学力検査の合計点とは別に、内容に応じて加点される(図)。書類の提出は任意で、「任意であっても提出しよう」という姿勢自体に主体性があると考え、評価している。実際、大学入学後のGPAやアンケート調査の結果を見ると、教科学力だけでなく、リーダーシップや自律性など

の資質・能力も、同制度を利用した学生は高い傾向だと言う。

ただ、高校時代の活動を入試で適切に評価するためには、学校推薦型選抜や総合型選抜で行う面接や口頭試問、書類審査、適性検査の精度を上げるべきだと、西郡大副学長は説明する。

「志望理由に加え、提出書類の内容を深める質問をするなど、面接を行う学部・学科が、その生徒ならではの回答を引き出すような問い方を工夫することが必要です」

また、入試では、生徒が活動に自主的に取り組んできたかを最も重視して見ている。入試に有利だから、教師に言われたからといった理由で活動に取り組んでも、生徒の力にならないと考えている。

「面接で高校での活動について聞くと、自主的に取り組んできた生徒は、伝えたい思いが強く、どんな言葉が出てきま

す。一方、受動的に取り組んできた生徒は、準備した内容しか話せず、突っ込んだ質問をされると、言葉に窮します」

大学の授業で課すレポートも、高校で自主的に探究学習などに取り組んできた学生は、自分なりの解

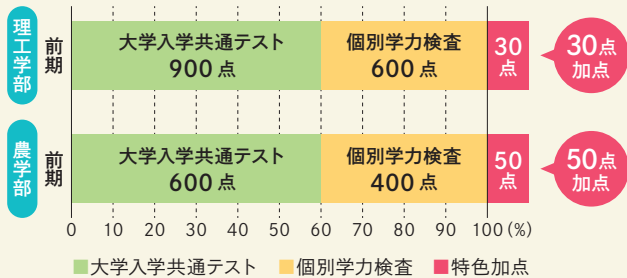
決策まで書くことができる。そして、低学年次からそうしたレポートが書ける学生は、踏み込んだ卒業研

#### 図 特色加点制度の概要

##### ◎申請できる活動実績の例

- 研究活動(探究型学習、課題研究、各種教育プログラムなど)
- 課外活動(部活動や生徒会活動など) ● 学校行事(担当した役割など)
- 社会活動(ボランティア、地域活動など) ● 資格・検定取得
- 海外留学経験 ● 大会・コンテスト(実績など)
- その他主体的な活動(個人的な取り組みも可)

##### ◎2023年度一般選抜の加点例(理工学部・農学部の場合)



※大学の提供資料を基に編集部で作成。

#### 2025年度入試情報(\*)

- ◎学校推薦型選抜や総合型選抜も含めて、基本的には現行の方針を継続。
- ◎大学入学共通テストを課す選抜においては、大学入学共通テストの「情報I」を課す。2022年度内に、配点などを公表予定。

\* 2022年9月13日現在。



副学長、人文・社会科学域  
教育学系 教授  
**西郡 大**  
にしごおり、だい  
2022年4月から副学長。

究に挑戦する傾向があると言う。

「探究学習などについては、入試を意識して奇麗な結論にこだわり過ぎた取り組みは、必ずしもよい評価とはなりません。結果・成果だけではなく、何に関心があり、問題解決のためにどのような試行錯誤をし、失敗も含めてそこから何を学び、それを踏まえて大学で何をしたいのかを、明確に言語化することが重要です」

現在は、早期合格者にとって魅力的な入学前教育を検討中だ。学校推薦型・総合型選抜の合格者には、入学前に新しい学びに挑戦してほしいと、西郡副学長は語る。

「受験勉強中は学びへの意欲が高く、入学後の学びを具体的に描いていると思います。ところが、合格すると安心してしまい、学習が続かなくなる生徒が少なくありません。入学までの時間を使って大学で挑戦したいことを改めて考え

たり、その準備に取り組んだりすることで、入学後によりスタートを切ってほしいですし、ほかの学生により刺激を与える存在になってくれることを期待しています」

### 新設科目を中心に、従来の方向性でよいかを検討中

同大学は、2025年度入試について、大学入学共通テストでは「情報Ⅰ」を必須で課すこと（一部学部は選択）を始め、新学習指導要領で新設された科目の出題範囲について公表した。22年度内には、配点なども公表する予定だ。

「大学入学共通テストの利用に関する検討では、数学の出題範囲の拡大による受験生の負担への配慮や、高校における情報科の指導体制の現状を考慮し、『情報Ⅰ』の配点は当面大きくできないのではないかとという意見が出ました。今後、配点や科目選択の方法などについての議論を重ね、適宜公表します。個別学力検査については、新学習指導要領の内容を精査し、どのような方針で出題すべきかを

慎重に検討しています」

新学習指導要領の実施による、新たな入試の導入の予定はない。これまでも、探究的なものの見方や考え方、学びに向かう力などの評価を重視した入試を行っており、求める人材を選抜することができていると考えているからだ。

「入試を変えるのであれば、本学の学生として身につけるべき力を育成するための教育改革とともに行うべきでしょう。GPAやアンケート調査の結果などから、高校時代の活動と学生の成長の関係や、一連のカリキュラムによる学生の成長を継続的に見取り、それを入試に反映していきたいと考えています」

### リベラル・アーツ教育で学び続ける力を養う

同大学は、学士課程で身につけるべき資質・能力を、「基礎的な知識と技能」「課題発見・解決能力」「個人と社会の持続的発展を支える力」の3項目から成る「佐賀大学学士力」と定めている。それを

基に、各学部がカリキュラムを設計し、教育の質保証を図っている。

さらに、10年先を見据え、リベラル・アーツ教育を重視している。その1つが、1コース8単位で構成される「インターフェース科目」だ。「環境」「地域・佐賀学」などの7コースから1つを履修する。複数の分野を横断的に学ぶことで、視野を広げ、自分ならではの発想ができるようになることがねらいだ。また、同科目での学びを専門科目に生かせるよう、同科目は2年次後期と3年次に配置されている。

21年度に始めた「キャリア・アクセラレーションプログラム」は、社会人基礎力の育成と、キャリアデザインの明確化をねらいとしており、学生は、企業と仕事について語り合ったり、協働で創作活動を行ったりする。

「人生100年時代と言われる中、必要なのは『学び続ける力』です。大学卒業後も自分の課題意識や興味・関心に沿って学びを深めたり、広げたりするための土台となる、豊かな教養の育成に力を入れていきます」

# 2025年度大学入試に向けた高校の検討課題

各大学が公表する2025年度入試に関する情報を受け、高校はどのような観点で、今後自校が取り組むべき課題を検討すればよいのか。ここでは、検討の観点について考えた上で、その観点において取り組むべき課題に先進的に着手した2つの高校の事例を紹介する。

## 観点①

### 教育課程や教育活動の見直し

大学からの入試科目の公表後、すぐに動き出せるよう、現時点での情報で対応を検討

2025年度入試に向けて、どのような指導をしていけばよいのか、各大学が公表した22年9月時点の25年度入試の情報から、今後、各校で検討すべき事項を①に整理した。

最も影響が大きいのは、現高校1年生だ。志望校の受験に必要な科目が履修できるようにしているか、出題内容をカバーできる指導計画となっているかを確認したい。また、入試制度の変更は、経過措置科目や出願動向の面で現高校2年生にも影響があるため、24

年度入試での対応が求められる。

さらに、25年度入試の出題科目が明らかになった後は、23年度に入学する現中学3年必生以降の学年で、どのような教育課程を編成するか検討が必要になるだろう。

最終的な判断は、23年3月にすべての大学が25年度入試の出題科目を公表し終えてからとなるだろうが、①の学年別のチェックポイントに沿って校内での検討を進め、対応を想定しておくことで、情報が出そろった時に、すぐに動き出せるようにしておきたい。

## 観点②

### 探究学習と総合型・学校推薦型選抜

探究学習で深めたことと、大学で学びたいことの一致点を探る指導を

総合型・学校推薦型選抜を受験する場合、②のように、様々な対応を早期化する必要がある。2年次3学期を「3年次0学期」として一般選抜に向けたスタートを切るのと同様に、2年次11月頃に総合型・学校推薦型選抜を生徒に意識させるとよいだろう。例えば、志望する選抜方式にかかわらず、2年生全員が志望理由書を書くことを、受験への意識を高める機会とする高校も増えている。

P.5で示した通り、「探究型の入試」が拡大傾向にある中、探究

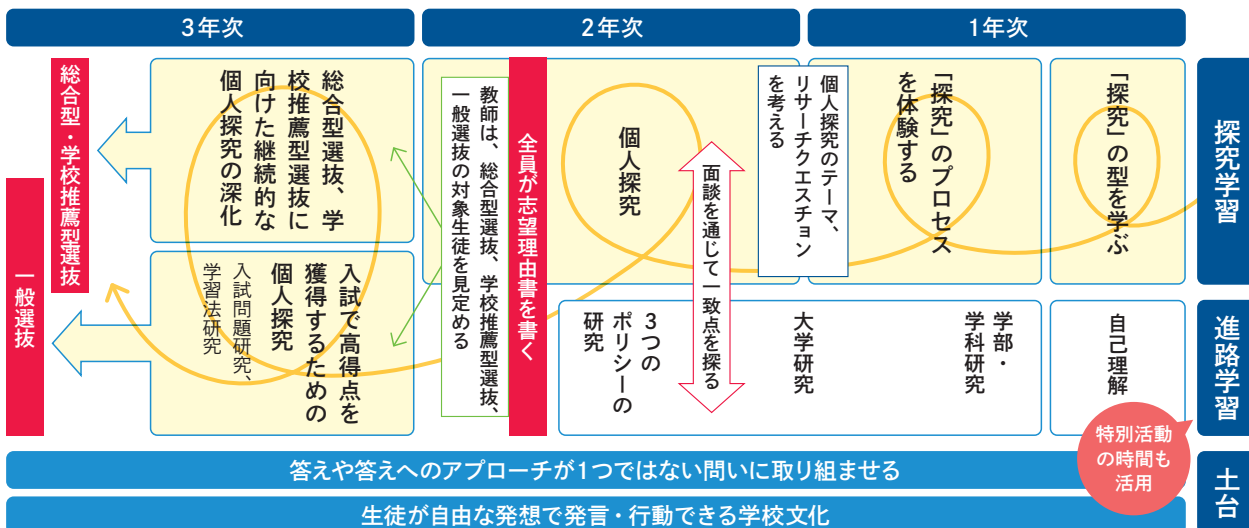
学習で深めてきたことが、志望校で学びたいことと合致すると、充実した志望理由書を書くことができる。1年次から探究のプロセスを繰り返し経験し、2年次には、自身の探究学習が大学で学びたいことにどうつながるのか、面談などで教師が示唆を与え、探究学習と進路の一致点を探っていく。また、探究を深める土台となる、答えや答えへのアプローチが1つではない問いに取り組みせる授業や、生徒が主体的に活動できる学校文化を築くことも重要だ。

図1 2025年度大学入試に向けた学年別のチェックポイント

<p>現高校2年生</p>	<p><b>☑ 経過措置科目『旧情報（仮）』の試作問題の校内実施</b>                  大学入試センターは、22年11月9日をめぐに、『旧情報（仮）』の試作問題を配点とともに公表する。国立大学志望者が、仮に高校卒業後に再度大学を受験することになった場合、多くは『旧情報（仮）』を受験しなければならない。1・2年次に情報を履修している場合、2年次の段階で、どの程度得点できるのかを確認しておきたい。本人が大丈夫と思えば、それでよく、難しいと不安になっていたら、現役合格への後押しになる。</p> <p><b>☑ 高い志望の堅持</b>                  入試制度が変更される前年は、過去のデータから、例外なく安全志向になり、志望校の難易度を下げる生徒が増えることが分かっている。志望校別に集会などを行い、志望校への揺るぎのない思いを醸成しておきたい。</p>
<p>現高校1年生</p>	<p><b>☑ 教育課程や指導計画の点検</b>                  生徒が志望校を受験できない教育課程になっていないか、また、3年次に配置されていることが多い学校設定科目で具体的に何を指導するのか、次の観点で点検しておきたい。（詳細はP.6～7参照）</p> <p><b>【地理歴史・公民】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大学入学共通テスト『地理総合、歴史総合、公共（から2科目）』で受験できない大学・学部は少なくない。『公共、倫理』『公共、政治・経済』であれば、ほぼ全大学への対応が可能になりそうのため、特に理系の3年次に「倫理」「政治・経済」が設置されていれば、入試科目として利用しやすくなる。</li> </ul> <p><b>【数学】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>文系・理系とも、個別学力検査において、「数学B」の「統計的な推測」の出題を想定した指導計画が必要だ。一方、文系における「数学C」の「平面上の曲線と複素数平面」は、学習していなくても受験に支障がないと考えてよいだろう。</li> <li>「数学A」「数学B」「数学C」の出題範囲を明示していない大学が多い。「数学A」の「数学と人間の活動」、「数学B」の「数学と社会生活」、「数学C」の「数学的な表現の工夫」の指導に悩むところだが、少なくとも「数学A」の「数学と人間の活動」には、整数の約数や倍数、ユークリッドの互除法、二進法等が含まれるので、学習しておくのが望ましい。</li> <li>これまでの大学入学共通テストで「数学Ⅱ」を受験する生徒が多かった高校では、『数学Ⅱ、数学B、数学C』の受験が可能な教育課程になっているか、確認が必要。</li> </ul> <p><b>【情報】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>3年次に何かしらの形で対応することになると思われるが、担当できる教師がいなかった学校もある。対応を必要とする生徒数、指導可能な教師数を踏まえて、教育課程内で対応できるのか、補習などで対応するのか、教材は何を使用するのか、どのように進めるのかを検討しておきたい。場合によっては、生徒同士が学び合う体制づくりも考えたい。</li> </ul> <p><b>☑ 2年次の科目選択に向けて（理系）</b>                  25年度入試で、大学入学共通テスト及び個別学力検査の理科の科目指定を変更する大学がある。志望校が明確な生徒には、現行入試の出題科目で判断せず、志望校が25年度入試の出題科目を公表したかどうかを自ら確認させて、判断するよう指導する。23年3月まで、すなわち、校内の選択科目決定時期までに公表しない大学もあり得るため、柔軟な対応ができるようにしておきたい。</p> <p><b>☑ 大学入学共通テスト試作問題の研究</b>                  大学入試センターは、22年11月9日をめぐに、地理歴史、公民、数学、情報について、各出題科目の全体の構成が分かる試作問題を配点とともに公表する。試作問題の傾向を定期考査等に取り入れられるよう、各教科で研究を進めたい。1年次の履修科目については、部分的にでも、試作問題に取り組みせるとよいだろう。</p>
<p>2023年度入学生                  （現中学3年生）                  以降</p>	<p><b>☑ 教育課程の見直し</b>                  教育課程は既に決定しているだろうが、上記の現高校1年生のチェックポイントに照らして、可能な限り安定した教育課程の編成を検討したい。</p>

※編集部で作成。

図2 3年間の探究学習と進路学習の進め方（例）



※編集部で作成。

# 高校 実践事例 1

## 観点① 教育課程や教育活動の見直し

### 生徒主体で学び方を学ぶ、週1コマの「学びの アセスメント」で、生徒の自己調整力を高める 京都府・京都市立堀川高校

2022年度入学生から、生徒同士が学び方や学びのあり方について語り合う「学びのアセスメント」を、1年次に始めた。3年次には、自己調整しながら学習を進められるようになっていくことが目標だ。

自分で学ぶ力を育み、自らデザインした学びを実践できるように

『自立する18歳』の育成」を最高目標に掲げる京都市府・京都市立堀川高校は、2022年度入学生教育課程も、その目標の下で編成した。科目や内容の扱いに大きな変更があった国語科、地理歴史・公民科、数学科、情報科に関する情報を、校内で研修会を実施し共有した上で、各教科での対応を検討。例えば、「数学C」が大学入学共通テストの出題範囲となることも想定し、3年次に学校設定科目「数学演習」を設定した。また、授業時数は、これまでの週35単位時間

から、学習指導要領の総則に示された「週当たりの授業時数は、30単位時間を標準」を基準に検討した。

教育課程の編成過程では、学習の自己調整力をどのようにして育成するのかも検討した。飯澤功<sup>いゐざわ いくお</sup>教頭は、次のように説明する。

「1年次から生徒主体で探究学習や学校行事を行うことで、3年次には、自ら計画を立て、問題を解決しながら、活動を進めることができるようになります。ただ、そうした自己調整力を教科学習には生かし切れず、学力が伸び悩む生徒が少なくありませんでした。そこで、教科学習における学び方を学ぶ『学びのアセスメント』を、

1年次に設けることにしました」

検討の結果、1年次の総単位数は33単位とし、教育課程外に「学びのアセスメント」(図1)を週1コマ配置。2年次の総単位数は33単位、3年次は31単位で編成し、毎日7限まで授業を行っていたこれまでの教育課程に比べ、生徒が自分の望む学習をできる環境を整えた。

また、各大学の、25年度入試で課す教科・科目等に関する情報の公表を受け、校内で対応を協議。「情報I」については、22年11月に公表される大学入学共通テストのサンプル問題を踏まえて、3年次の夏季休業中の補習実施など、詳細を検討する予定だ。地理歴史・公民

#### 学校概要

設立 1908(明治41)年  
形態 全日制/普通科・人間探究科・自然探究科/共学  
生徒数 1学年240人  
2022年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、北海道大、東北大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、京都府立医科大、京都府立大、大阪公立大などに131人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ299人が合格。



副校長  
中村陸子  
なかむら りつこ  
教職歴33年。同校に赴任して13年目。



教頭  
飯澤功  
いゐざわ いくお  
教職歴18年。同校に赴任して19年目。



進路指導主事、企画推進部長  
滝本梨恵子  
たきもと りえこ  
教職歴18年。同校に赴任して13年目。理科(化学)。



1学年主任  
飯島弘一郎  
いゐじま こういちろう  
教職歴10年。同校に赴任して6年目。国語科。

科は、大学入学共通テストで「公共」と「政治・経済」または「公共」と「倫理」を選択できる大学が想定より多かったため、「歴史総合」及び



図1 「学びのアセスメント」概要

- ◎目的 ①個人として、自分自身の学びを振り返り、学習方法を自己調整する。  
②クラスとして、高みを目指し、学び合う学習集団をつくる。
- ◎実施日・時数 毎週金曜日の4時間目、年間26時間（予定）※教育課程外
- ◎実施教科・時数 国語科（年間10時間）、数学科（年間4時間）、英語科（年間10時間）、地理歴史・公民科（年間2時間）
- ◎進め方 使用する資料やプリントなどは、教師が用意。各クラスの教科系の生徒と担当教師が事前に打ち合わせをし、資料配布や説明などを行う進行役は、教科係が務める。



「学びのアセスメント」は生徒のみで進行。教師は、教室には入らず、廊下から見守る。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 「学びのアセスメント」年間計画（抜粋）

カリキュラム・ポリシーより（1年次）

**学習姿勢：**目標と目的を意識し、調整しながら謙虚に学ぶ。  
**なれる：**謙虚に学ぶ姿勢を持ち、作法を身につける。  
**たのしむ：**他者とかがわり、見聞を広め、知性を育む。

	学年の様子	実施教科	学びのアセスメントで確認したいこと/気づかせたいこと
4月	<ul style="list-style-type: none"> <li>■探究 DIVE = 学問的興味を刺激し、学びに向かう意欲を喚起</li> <li>■課題テスト、キャリアパスポート</li> <li>■第1回学習状況連絡会（入学時の学力/学習状況の確認）</li> </ul>	4/22 国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>• やればできるはずのことができているか認識する。</li> <li>• 自身に定着するためにかかる時間や方法を認識する。</li> <li>• 自分なりに計画を立てて臨み、うまくいった点、不十分だった点を言語化し、調整しながら学ぶことの意義を認識する。</li> <li>• 自身の学習スタイル（予習、授業、復習への向かい方）を見直し、友達を真似てみようと感じる経験をする。</li> </ul>
5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>■スタサポ返却 = 学力 GTZ に対し、学習習慣がどうか確認</li> </ul>	5/2 英語 5/13 数学	<ul style="list-style-type: none"> <li>• = 学習スタイルのよい生徒を教科担当者として担任で共有したい。</li> </ul>

同校では、「学年の様子」として、学校行事やLHR、模擬試験などに結びつけて、生徒の目指す姿を学年・月ごとに示している。それを踏まえて、「学びのアセスメント」で行うことを、右欄の「学びのアセスメントで確認したいこと/気づかせたいこと」として明記。各教科担当者は、それを基に、「学びのアセスメント」の自教科の年間計画を立てた。

※学校資料を基に編集部で作成。

図3 「学びのアセスメント」国語科の実施内容（抜粋）

ポイント

- 「言語文化」の確認の時間とする。
- 学習の展開に合わせて、次の3ステップを繰り返し、らせん状に発展させる。  
①基礎事項の徹底 ②ノートづくりを軸にした予習・復習の質の向上 ③『「言語文化」を学ぶ意味』を理解した上で、自ら問いを立て、相互に深める
- この時間のための事前学習は必要ないようにする（教科係主体で進めるため、全く準備をしていない生徒がいたとしても、その時間を運営できることが必須要件）

	確認したい項目	内容
第1回（4月）	<ul style="list-style-type: none"> <li>• やればできるはずのことができているか認識する。</li> <li>• 自身に定着するためにかかる時間や方法を認識する。</li> <li>• 自分なりに計画を立てて臨み、うまくいった点、不十分だった点を言語化し、調整しながら学ぶことの意義を認識する。</li> </ul>	【サイクルI・ステップ1】①授業内容に準ずる小テスト（文法・単語等）を実施、②各自で採点した後、成果と課題を整理し、改善策を考える、③振り返りの結果をグループで共有、④個人で気づいたことをまとめる

※学校資料を基に編集部で作成。

「地理総合」を受験科目とする基本方針を確認しつつ、3年次の選択科目について改めて検討している。

他者との対話から、自分にとってのよりよい学びを探る

同校にとって新たな活動となる「学びのアセスメント」の目標は、3年次までに、生徒が自分に必要

な学び方を自分で選び、学びを進められるようになることだ。その目標から逆算し、1年次のうちにできるようになってほしいことをイメージして年間計画（図2）を立て、それを基に、各教科が具体的な活動計画を作成した（図3）。

実施教科は、全教科の学習の土台となる国語・数学・英語で、毎時

間1教科とした。また、2年次の科

目登録に向けて、生徒に学ぶ意義を深く感じてほしいと考えた地理歴史・公民もスポットで実施した。

4月に実施した1回目は国語で、古文文法の小テストの結果から、個人で学習を振り返った後、グループで教え合いや、学習方法・動機づけの方法に関する意見交換を行った（図3）。他教科も同様の進め方で、他者の学び方や学びに

対する考えを聞くことで、自分にとってのよりよい学びを探っていく。

「学びのアセスメント」の進行役は、教科系の生徒が務める。各教科の教師から、事前にその時間の目標や大まかな流れについて指導を受けた後、教科係は、資料配布や説明の仕方、まとめの内容など、クラスに合った方法を考える。当日、教師は廊下から見守り、気づいた

点は、終了後に教科係に伝えるとともに、次の活動計画に生かす。1学年主任の飯島弘一郎先生は、教科係が重要な役割を担うと語る。

「活動の雰囲気づくりも、教科係が担っています。年度初めに教科係を決める際、その教科の成績が優秀でなくても、その教科が好きで、クラス全員でその教科の学習を深めていこうとする意欲のある生徒に教科係を務めてほしいと伝え、実際、そのような生徒が就きました。前期は、教師が準備をしていましたが、後期は、教科係に徐々に任せていく予定です」

「分らない」と言える、点数に一喜一憂しない生徒

「学びのアクセスメント」が始まって半年。生徒の学び方は変化しつつある。6月の調査では、自ら数学の予習をしてくる生徒が、例年に比べて多かった。「学びのアクセスメント」で学び方を学ぶ中で、予習の重要性に気づいたのではないかと、進路指導主事の滝本梨恵子先生は語る。学び合う集団づくりも、

例年より早く進んでいると言う。

「1年生のうちは、中学校時代からの小さなプライドがあり、『分からない』となかなか言えないのですが、『学びのアクセスメント』の時に、『分からない問題をしつくり教え合う経験をしているからか、クラス内で質問し合える関係が築かれつつあります。『分からない』と言い合えるムードを、生徒自身も喜びと受け止めています」

中村陸子副校長は、1年次前期の中間考査後の生徒の様子に、これまでとの違いを感じた。

「入学後初の考査では例年、点数のみを見て一喜一憂する生徒が大半ですが、今年度はそうした生徒が少なかったようです。『学びのアクセスメント』を通じて、考査は、できなかった点を把握し、学び方を振り返る機会だと、理解しようとする姿勢が見られます。そうした理解が今からあれば、2年次以降、模擬試験なども十分活用することができると、期待ができます」

「学びのアクセスメント」の効果検証と改善は、毎時間記入する振り返りシートや、授業アンケート

を基に行う予定だ。振り返りシートは、年度初めの記入内容と比較して、学習の悩みを具体的に把握することができるようになったか、自分で解決策を考えられるようになったかなどを見取り、その結果を生徒にフィードバックする形成的評価にも生かしていく。

すべての学びの言語化により「自立する18歳」に向かう

22年度入学生生教育課程では、探究学習に関する科目を増やした。1年次には、前期の「総合的な探究の時間」で、生徒が自分の関心をじっくり掘り下げ、自身で解決したい課題を見いだす機会を設けた。旧課程のその時間を実施していた探究手法の学習は、「理数探究基礎」を新設して行うことにした(図4)。2年次は、前期のみだった「総合的な探究の時間」を通年で設け、後期は、前期に取り組んだ個人探究を続けたり、チームで探究したりする時間として、探究のさらなる深化を目指す。「教科学習、探究学習、学校行

図4 1年次の探究学習に関する科目の構成

	1年生 入学直後	前期	後期
「総合的な探究の時間」	<b>探究 DIVE</b> 入学後、丸2日間、どっぷり探究につかる。一見、手の出しようのない「問い」に「朋」とともに手と頭を使って答えを導き出していく。	<b>探究基礎 HOP</b> 自分自身の問題意識や興味を深める期間。探究の「愉しさ」を満喫しつつ、探究という営みが様々な場面で役に立つことを実感する。課題設定の方法について学ぶ。	<b>探究基礎 STEP</b> 自分の興味のある分野の少人数講座に所属し、具体的な課題の解決に向け、研究計画という戦術を立てられるようになるための期間。「常識」を「朋」と議論する。
「理数」	<b>理数探究基礎</b> 理数的な探究活動を複数回行うことで、探究の「型」(仮説実証の方法、研究倫理、数学・理科で学んだことの探究への応用)を身につける。国語力や論理的思考力も育成。文系を志望する生徒も、物理等の考え方を理解できるようにする。		

※学校資料と取材を基に編集部で作成。

事等のすべての活動で、なぜ学び、どう試行錯誤して成長してきたのかを、生徒が言語化できるようにすることが、『自立する18歳』に向かう基礎となり、25年度大学入試を始めとするこれからの大学入試で求められる資質・能力の育成にも結実すると考えています(中村副校長)

高校  
実践事例  
2

観点② 探究学習と総合型・学校推薦型選抜

探究の重要な要素を「探究の思考」に整理。  
希望進路の実現につながる力を育む

山形県立山形北高校

探究学習に力を入れてきた結果、総合型・学校推薦型選抜での合格者の割合は、年々増加。その手応えから、生徒の資質・能力をさらに育もうと、22年度は、探究学習の改善を図った。

生徒の成長を目のあたりにし、  
探究学習の重要性に気づく

2022年度大学入試において、山形県立山形北高校では、国立大学・公立大学の合格者数に占める総合型・学校推薦型選抜での合格者数の割合が約65%と、例年の約50%を上回った。その大きな要因は、1年次から取り組んできた探究学習にあると、19年度入学生生の学年主任を務めた鈴木佳徳先生は語る。

「生徒は1・2年次に、『自分で課題を設定↓情報収集↓整理・分析↓まとめ・表現』といった、いわゆる探究のサイクルを経験してきました。その中で、『探究の思考』

(P.22図1)を身につけた生徒は、志望理由書や面接練習で、大学・学部・学科の志望理由を、自分の学びを踏まえ、自分の言葉で語れるようになっていました。そのような生徒が大学入試で評価されたのだと捉えています」

同校が探究学習に力を入れ始めたのは、18年度のことだ。それまで学年主導だった「総合的な学習の時間」の運営を学校主導に切り換え、学年ごとに異なっていた活動内容を学校全体で統一し、1年次から探究学習に取り組みことにした。進路課主任の大内清輝先生は、その理由を次のように語る。

「今後増えていくであろう大学

入試における多面的・総合的評価には、単に教科学力を上げるだけでは対応し切れないのではないかとこの危機感がありました。志望理由書や調査書に書ける内容を増やさなければならぬと考え、着目したのが探究学習でした」

生徒の能力を伸ばしつつ、様々な入試に対応できるようにと始めた探究学習だったが、自分が探究した課題にもっと深く取り組める大学・学部はどこかといった視点で志望校を選ぶようになるなど、生徒の成長を目のあたりにし、生徒にとって探究学習は重要な学びであることを再認識したという。

「医療分野への進学を迷ってい

学校概要

設立 1928 (昭和3) 年  
形態 全日制/普通科(女子校)・音楽科(共学)  
生徒数 1学年200人  
2022年度入試合格実績(現役のみ) 国立大学は、北海道教育大、宮城教育大、山形大、福島大、東京藝術大、新潟大、山形県立保健医療大、山形県立米沢栄養大などに70人が合格。私立大は、東北学院大、東北芸術工科大、東北福祉大、宮城学院女子大、東北文教大、法政大、武蔵野音楽大、洗足学園音楽大などに延べ163人が合格。



進路課主任  
大内清輝  
おおうち・きよてる  
教職歴22年。同校に赴任して6年目。国語科。



1学年主任  
鈴木佳徳  
すずき・よしのり  
教職歴34年。同校に赴任して4年目。地理歴史・公民科。



教務課  
柴田勝将  
しばた・かつまさ  
教職歴6年。同校に赴任して6年目。理科(化学)。

たある生徒は、3年生の時に、自ら医療従事者に連絡を取り、仕事の話や現場の課題について話を聞き、自分のそれまでの学びや培ってきた資質・能力と照らし合わせた上で、最終的に看護学部への進学を決めました。探究

学習で身につけた『探究の思考』を、自分の進路実現に生かしたのです。探究した分野と希望進路の分野が一致しない生徒もいます。探究学習を通じて身につけた情報の収集・分析力や、問題を自分に引きつけて捉える力、行動力などは、生徒の問題解決力を伸ばし、その結果、入試にもつながると捉えています」（大内先生）

1年次はグループ、2年次は個人で、探究のサイクルを回す

同校にとって探究学習初年度の18年度は、教務課主任や進路課主任、各学年主任が定期的に集まり、探究学習の内容を検討。活動計画ができたなら1学年団に渡し、随時実践するといった流れだった。常に慌ただしい状態ではあったが、1年間の議論と実践は、その後の組織的な取り組みの土台となった。19年度は、教務課や進路課、各学年主任、司書教諭、情報科の教師から成る「探究委員会」が授業計画を作成した（図2）。1年次は、地域の課題をテーマに、グルー

図1 「探究の思考」を軸とした「1年次に身につけてほしいこと」

1. 探究のサイクルを回すことで、「探究の思考」を身につける
  - ①情報の収集（現状の把握。今はどうなっているか）
  - ②課題の設定（現状を知った上で、何を問題とするか）
  - ③実験・調査の計画（問題解決に向けて、どんなことを調査するか）
  - ④実験・調査による検証（今までにない研究・活動のほず。実験やアンケートなどを行い、自分の手でデータを集める）
  - ⑤データの分析・解析（データから分からないことをまとめる）
  - ⑥解決策の提案（問題に対しての自分なりの方法を提案）
2. 各教科の力を伸ばし、探究につなげる

※学校資料を基に編集部で作成。

プで探究学習に取り組む。生徒は、自分の興味・関心を基に7分野から1つを選び、その分野で4人1組のグループを作る。そして、グループで探究のサイクルを回した上で、ポスターセッションによる最終発表を行う。指導は、1学年団の教師が中心となり、各分野を2人ずつで担当する。2年次は、探究のサイクルを個人で回すことを経験させるため、社会問題についての課題を自分で

図2 探究学習の内容

	活動内容	担当教師
1年次	<p>●グループ探究</p> <p>山形県、または県内市町村の課題を発見し、解決策を提案する。生徒は、自身の興味・関心に基づいて、A～Gの7分野の中から1つを選び、4人1組のグループで探究を行う。A食料・農業、B健康・福祉、C経済、D教育、Eジェンダー、F環境・エネルギー・技術革新、G国際・観光</p> <p>活動の流れ：①課題の設定、②調査活動、③中間発表、④発表の振り返り、⑤内容のブラッシュアップ、⑥最終発表</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1学年団の教師と、学年づきではない教師</li> <li>A～Gの各分野を教師2人ずつで担当</li> </ul>
2年次	<p>●個人探究</p> <p>地域に限らず、社会問題についての課題を自分で設定し、解決策を提案する。</p> <p>活動の流れ：1年次と同様</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2学年団の教師と、学年づきではない教師</li> <li>教師1人あたり、生徒約14人を受け持つ</li> </ul>
3年次	<p>●個人探究</p> <p>大学での学びを見据えて課題意識や今後の展望を具体化するために、1・2年次に行った探究学習を踏まえて、大学・学部・学科研究や、小論文作成などを行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3学年団の教師</li> </ul>

※学校資料と取材を基に編集部で作成。

設定し、個人探究に取り組む。そして、3年次は、大学での学びを見据えて、課題意識や今後の展望を具体化するために、大学・学部・学科研究や、小論文作成を中心とした活動を行う。探究学習の指導に際しては、担当教師の配置を工夫した。質問等を通じて、生徒の興味・関心や疑問を引き出し、思考を深める支援をするファシリテーターに徹するため、探究委員会は、あえて担当教

科とは関連のない分野や課題に取り組む生徒を担当するように、担当教師を割り振った。自分の担当教科だと、つい生徒に答えや研究方法を教えたくなるからだ。探究のサイクルの中でも、生徒が最も成長するのは「調査」の場面だと、鈴木先生は語る。「調査では、社会問題の解決に取り組む人に、生徒が自分で連絡して約束を取りつけ、訪問して話を聞きます。課題設定をしたものの、

その課題がいま一つ自分事になっていなかった生徒も、当事者の生の声に接し、現状を知ること、問題意識が急速に深まり、探究学習に取り組む態度が変わります。また、そうした経験をすることで、新たに話を聞きたい人が出てきた時も、臆せず、自分から行動することができるようになります」

「探究の思考」を探究学習の軸に据える

22年度入学生の探究学習は、25年度入試を見据えて、19年度のカリキュラムをベースにしつつ、次のような改善を行った。

●「探究の思考」を生徒・教師間で共有

22年度入試で総合型・学校推薦型選抜の合格者数が増えた要因は、前述の通り、生徒が探究学習を通じて、情報の収集・分析力や、問題を自分に引きつけて捉える力、行動力などを身につけたことにあると考えた。そこで、探究の重要な要素を「探究の思考」(図1)として整理し、探究学習の軸に据えることにしたと、教務課で探究

委員の柴田勝将先生は説明する。

「年度初めに行く探究学習のガイダンスで『探究の思考』を示し、探究学習が目指すところを生徒や教師と共有しました。また、調査や実験には数学や理科の力が必要になるといった、『探究の思考』と教科学習の関係を示すことで、教科の授業への意識も高めました」

●山形県の現状を知る活動を導入

以前はガイダンス後、すぐに課題の設定に取り組ませていたが、県の現状をよく知らない生徒は、課題を見いだすことが難しかった。そこで、図書館がスクラップした新聞記事を活用し、県の課題を一通り俯瞰する場を設け、探究学習の流れを簡易的に経験させた。

●中間発表をスライド形式に変更

11月に行う中間発表は、プレゼンテーションソフトで8枚のスライドを作成し、それを基に発表する形式に変更する。

「以前の発表資料であるA1判のポスターには多くの情報を書き込めましたが、スライドでは要点を簡潔にまとめ、発表時に口頭で補足することになります。表現力

や発表力を育もうと、形式を変えました」(柴田先生)

中間発表では、大学や企業から招いた関係者に寸評してもらおう。生徒はそれを受けて再調査・再実験を行い、考察を深め、その内容をまとめて、3学期に行う最終発表に臨む。

「探究学習の評価は、昨年度までは、最終発表時のポスターを生徒が相互評価し、それに教師の評価を加える形で行っていました。今年度は、活動ごとにルーブリックを用いて評価する仕組みを確立しようとしています。また、生徒が毎授業書く振り返りは、生徒の次の学習につなげる形成的评价に活用する予定です」(柴田先生)

各教科・科目の授業にも探究的な学びを組み入れる

同校では、新学習指導要領の理念を踏まえ、各教科・科目の授業でも、生徒が実験や観察を通じて答えを見いだす活動や、生徒同士で議論し、他者の考えも踏まえて自分の意見をまとめる活動など、

生徒が自ら考え、問題解決に取り組む場面を設けている。

「本校の生徒を対象にした授業評価アンケートには、授業で探究的な活動が行われているかを聞く項目があります。学校の実践目標としても掲げられている『探究的な学習の推進』の到達状況を定期的に確認できるようにしています」(鈴木先生)

同校では、各大学による、25年度入試において課す教科・科目等に関する情報の公表を受け、対応を検討中だ。例えば、国語は、22年度入学生の教育課程で、2年次に「文学国語」、3年次に「論理国語」を配置し、3年次に小説を扱わないことになる。そこで、放課後や長期休業時に補習を実施する予定だ。

「25年度入試の動向はもちろん注視していますが、大学入試で求められる力は、今後も根本的には同じはず。入試情報に必要以上を右往左往することなく、社会で求められる資質・能力を生徒に着実に育むために、探究学習や教科学習の改善に取り組んでいきます」(鈴木先生)

# 大学入試におけるCBTが秘める可能性と今後の課題

入学者選抜にCBT（\*1）を活用する大学が増えてきている。アドミッション・ポリシーに掲げる資質・能力を測るために活用されたり、コロナ禍における感染防止策として活用されたりしているが、CBTには、どのようなメリットがあり、その導入には、どういったハードルがあるのか。大学入試センター大学入学共通テスト企画委員会CBT活用検討部会委員を務めた名古屋工業大学の林篤裕教授に聞いた。

**CBTの導入で、多様な資質・能力をより評価できるように**

大学入試センターでは、高大接続改革や情報教育の推進などの施策への対応の1つとして、大学入学共通テストにおけるCBTの活用について検討してきました。結果的に、それは見送られました。個別学力検査では、CBTを活用する大学が増えてきています（P. 25 囲み）。その理由として、コンピューターの活用により、出題形式・解答方法の幅が広がることが挙げられます。CBTでは、音声や動画を活用することができるので、例えば、理科の試験では、実験の動画を視聴させて実験の過程について考えさせる、英語の試験では、ネイティブ・スピーカーからの相

談の音声聞いて、それに英語で応えるといった出題が可能です。

将来的には、受験生の解答に依りて次の問題を出すなど、受験生が試行錯誤しながら解いていくCBTの試験が行われるかもしれません。情報の試験であれば、受験生がプログラミングをし、それを実行した結果を確認して、修正しながら目標に近づいていけたかを見るところといったものが考えられます。「複数の考え方を容認する」という、プログラミングの方法論に沿った出題が可能になるのです。そのように、CBTを上手に活用すれば、社会で求められる資質・能力をよりの確に評価することができるようになるでしょう。特に、新学習指導要領では、教科等横断で育成を目指す資質・能力の1つ

として、情報活用能力が挙げられています。文章や図表に加えて、音声や動画など、多様な素材から必要な情報を抽出し、分析する力を測ることもできます。

**試験の質を向上させる、操作ログの活用にも期待**

試験での操作ログ（自動的に残る記録）を容易に取得できることも、CBTを導入するメリットの1つです。解答のプロセスを把握する設計の試験にすれば、受験生がどのような思考を働かせたから正解に至ることができたのか、もしくは正解することができなかったのかを可視化できます。解答に要した時間や、解答の際に見た画面など、受験生が問題に



名古屋工業大学大学院 工学研究科教授  
アドミッションオフィス長  
大学入試センター 大学入学共通テスト  
企画委員会CBT活用検討部会委員  
**林 篤裕** はやし・あつひろ

専門は計算機統計学、教育工学、高等教育論  
岡山県立大学、大学入試センター、九州大学  
等を経て、2016年9月から現職。

取り組む過程をデータ化することで、問題の質の検証や、大学入学後の教育への活用などが期待できます。例えば、現代文の問題で、ある受験生は、素材文を読み進め

\* 1 Computer Based Testing の略称で、コンピューターを使った試験方式のこと。

## 個別大学の入学者選抜でのCBT活用例

### 自分の意見や写真の描写などを英語で述べる

東京外国語大学 一般選抜：英語

一般選抜の英語のスピーキング試験を、CBTで実施している。タブレット型のパソコン画面に示される問題は4つのパートから構成され、マイクに向かって音声で解答する。解答の残り時間は、画面にタイマーで表示される。

パート1は、受験生自身に関する質問で、インストラクションを聞き、合図の後、解答する。1つの質問への解答が終わると、自動的に次の質問に進む。パート2は、理由や説明を明確にして自分の意見を述べる問題で、1枚の写真を見て、3つの質問に音声で解答する。パート3は、写真の描写や比較を理由や説明とともに述べる問題で、2枚の写真を見て、3つの質問に音声で解答する。パート4は、抽象的なトピックについて、自身の経験や意見を述べる問題で、3つの質問の解答を1分間で準備した後、2分間でまとめて話す。準備時間が終わると、画面の下に「解答を始めてください」と表示され、音声で解答する。

### 再チャレンジも可能な基礎学力・学習力テスト

佐賀大学 学校推薦型選抜、総合型選抜

ペーパーテストでは技術的に評価することが難しい能力や領域について評価するため、独自に開発したCBTによる試験を実施している。基礎学力・学習力テストは、数学・物理・化学・生物・英語のうち、2科目程度から出題。問題は教科書レベルで、60分間で10～15問を解答する。

その場でコンピューターが自動採点し、全問正解であれば試験は終了。誤答があった場合は試験は継続となり、画面に不正解だった問題の解説文が表示される。受験生はその解説文を読んで、解答に必要な知識や考え方を学び、不正解だった問題の類題に再度取り組む。基礎・基本の定着度を測ることに加え、学習力を見取するというねらいがある。採点結果は、その後の面接試験の参考資料にもしている。

※独立行政法人大学入試センター「個別大学の入学者選抜におけるCBTの活用事例集」（2022年6月）を基に編集部で作成。

る中で、傍線部が出てきたら、それに対応する設問を解き、また素材文に戻るといった解き方をしていた。一方で、別の受験生は、素材文をすべて読んでから設問を解いていたといったプロセスの違いを把握できます。そうすることで、解答が同じでも、どちらの解き方をした受験生に入学してほしいかを、大学が判断することができるといいます。ほかにも、素材文を読み終わってから設問を表示するといったこともできるでしょう。つ

まり、大学が受験生に求める資質・能力が発揮される認知活動を促すような、精緻な問題設計が可能になるということです。

試験が効率化されて、複数回の実施も可能に

CBTには、試験を効率的に行えるというメリットもあります。ペーパーテストでは、問題冊子や解答用紙の印刷、輸送、配布、回収などに、労力と費用がかかりま

すが、CBTでは、それらを大幅に軽減することができます。また、受験者数の増減や、試験直前での問題の修正・差し替えなどにも、容易に対応することができます。

ペーパーテストでは難しかった試験の複数回実施のハードルも下がるでしょう。大学入学共通テストは、全国で同時刻に一齐に実施されています。そうした試験では、どうしても一発勝負的になり、病気や試験当日の事故などのリスクを受験生が抱えます。一方、CB

Tは複数回の実施がしやすいため、再挑戦の機会があることで、不測の事態に対応できるほか、受験生の実力がより発揮された結果に基づく選抜が可能になります。

ただ、複数回実施にする場合は、実施回によって問題が異なっても、受験生同士の能力を適切に比較できるよう、IRT(\*2)に基づき、統計的に品質管理された問題を作成する必要があります。そうした条件をクリアして、試験を複数回実施することができれば、受験生の資質・能力の経時的な変化を把握することも可能になります。IRTは、ペーパーテストであっても複数回実施の場合には必要ですが、実施や採点を効率的に行うことができるCBTとの親和性が高いのは確かです。

### 導入時の課題克服に向けて、引き続きの検討が必要

以上のように、CBTには多くのメリットがあります。しかし、大学入学共通テストのような、大規模で、受験生の人生にとって重

\* 2 Item Response Theory の略称で、項目反応理論のこと。

要な試験にCBTを導入するためには、乗り越えなくてはならないいくつかのハードルがあります。

端末やネットワークのトラブルへの対応など、監督者に技術的な専門性が求められるため、ペーパーテストに比べて実施に必要な人員の確保が難しくなります。会場によって、端末の仕様やネットワークの通信速度などの違いによる不公平性が高まるかもしれません。全国的に高い均質の受験環境の確保とトラブルに対応する体制が必要です。テストセンターで実施する場合には、本人確認のための生体認証、不正防止のための監視カメラの設置などは、個人情報やプライバシーの保護の観点から慎重に行わなければなりません。受験生や保護者、さらには社会全体からの理解を得られるような、合理的な説明が求められます。

本ではあまりなじみがないかもしれませんが、それを社会が許容できるかといった問題もあります。現在の大学入学共通テストは、トラブルが少なく、安定的に実施されています。CBTを導入するとしても、そのよさを引き継ぐ必要があります。克服すべき課題が多い現状では、大学入学共通テストのような、影響力の大きいテストをCBT化することは、現実的ではありません。CBTの導入自体を目的化することなく、国内外の最新動向も踏まえながら、受験生や保護者を始めとする社会全体が納得できる形を模索することが重要だと思います。

一方で、個別大学の入学者選抜においては、各大学の判断により、CBTの導入が進む可能性はあります。受験生に求める資質・能力のうち、ペーパーテストでは評価することが難しい資質・能力であれば、その導入や運営のハードルが高くても、CBTの活用に踏み切る大学が、今後も出てくると考えられます。

## セミナーのご案内

2022年  
11月11日(金)  
オンラインで  
開催!

# VIEWnext PRESENTS

今号の特集テーマと連動!

## 新学習指導要領に対応した大学入試をテーマとするオンラインセミナー 高大接続の視点で見通す2025年度大学入試

VIEW next 編集部・ベネッセ教育情報センター・ベネッセ文教総研による共同企画で、今号の特集テーマと連動したオンラインセミナーを開催します。セミナー開催時点の最新情報を基に、2025年度大学入試の見通しや高校としての課題を整理した上で、25年度大学入試を始めとするこれからの大学入試について、高校と大学が本音で語り合うパネルディスカッションを予定しています。今後の生徒への指導や支援の方向性を考えるヒントを得る場として、ぜひご参加ください。

### プログラム (予定)

◎情報提供 高校教育・大学入試・大学教育・社会のトレンドと、2025年度大学入試の見通し

◎パネルディスカッション 高大接続の視点で語り合う、これからの大学入試

登壇予定者：青山学院大学 学長 阪本 浩 / 佐賀大学 副学長 にしごり 西郡 大 / 山形県立山形北高校 鈴木佳徳 / 京都府・京都市立堀川高校 滝本梨恵子(録画登壇)

開催日時 2022年11月11日(金) 16時00分~17時30分

形式 オンライン ※お申し込みをいただいた方に、詳しい参加方法をご案内します。

参加申し込み方法 右の2次元コード、または、下記URLから登録してください。

<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article12472/>

参加申し込み締め切り 2022年11月7日(月) 参加費 無料

